

# サリ ヤ イスラ ム インド出身の元カトリック信者

:

明:ムスリムになって13年以上たつ、インド人女性による改宗。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: サリ ヤ イスラ ム

日 07 Apr 2014

集日 07 Apr 2014



私の物は、非常に宗教的かつ精神的意 の高い家庭に、神によって生を受けることになった1979年に始まります。私たちはイスラ ムに改宗する前は 的ロ マ カトリック教会の信者でした。私の家族は、教会 教区の活 においてとても活 でした。それゆえ、私たちの 戚の中には依然、 者 修道女 道 たちがいます（彼らは未だに 教をしてきますが、彼らへの は です）。私の祖父は、インド南部の故 ケ ララに教会を建てた程です。私の家族は理想を追い求めるタイプで、私たちは正しく かれてはいませんでした、良い人 であることを常に心がけていました。私たちは敬虔であることにおいて りを持ち、中でも母は特に きん出ていました。私たちの教区の 者が、女性の中の模 的な信者として母を持ち上げたのは、一度や二度ではありません。母はキリスト教徒の女性としてのお手本でした。彼女は日常的にバイブルを み、 心に宗教を 践していました。

しかし、私の母は精神的体 がほとんど いたの理由で、宗教への い不 を感じていました。彼女はバイブルの中に答えを探しましたが、そのことはさらに彼女の不 を募らせま

した。その当、弁士のイブラヒムカン氏が代理の法的アドバイザーとして短い期をの  
とでいていましたが、それは正の弁士が休暇を取っていたため、はあるビジネスの  
案件で急に法的なアドバイスを必要としていたからです。彼は有なムスリムで、母に  
イスラムを介すると、その数に母はイスラムを受け入れました。そのとき私は13でし  
た。

女である私の状は（控えめに言って、）混乱をめるものでした。母は婚姻がになった  
と感じ、婚しました。私は家庭を崩させたイスラムに憎の感情を抱きました。父は私  
たちを置いて去ってしまいました。イスラムはメディアが道する通りの宗教だと感じ  
ていましたが（アスタグフィルツラ：神に赦しをいます）、おかしな事に、アザン  
をくだけは嫌いではありませんでした。当の私はイスラムに憎し、ムスリムだけには  
にならないと誓っていました。しかし、私は母にしてはこの上ない敬意と情を抱いて  
いたので、彼女のような教ある文化人が、イスラムのような中世の物のどこに魅力  
を感じていたのか理解したいと思いました。ある日、彼女にようやくそのことについて  
ねることが出来ましたが、その答えはとてもシンプルなものでした。「バイブルにく  
まなく目を通してみなさい。」

私の「の旅」は、そこから始まりました。私はとても若かったですが、神は私がかんだ  
ものを理解出来るだけの成熟さを与えてくれました。私は非常に多くの矛盾やりをバ  
イブルから出しました。また、バイブルの中で言及されてはいるものの、キリスト教  
徒たちがそれについていないものなどもつけました。理的でない述をあちこちで感じ、  
破されてしまっている契をつけ、また言者ムハンマド（彼に平安あれ）についての明  
な言及もつけました。しかし、私はとても迷だったため、真理を受け入れることが出  
来ませんでした。私はキリスト教のをけると共に、しばらく比宗教に脱してしま  
が、イスラムのことをべるのだけは拒みけました。その、母がクルアンのスラトル＝  
イフラス（第112章）の翻と音がかれた手を私に送り、それをんだ私はそのになっ  
てしまいました。私はそれを翻と一に一日中朗しました 何度も何度もです。それは私にと  
ってタスビ フ

のようなものでした。いかなる典も私を足させることが出来ませんでした。私はつ  
いにクルアンに目を向け、それは私を倒したのです。それこそが、私が探し求めてい

た真理だったのです。そこには私の疑 への答えがすべてありました。そのとき、私は自分の 命にめぐり会ったことに 付きました。そこへ辿りつくのには2年を要しましたが、私は感 の 持ちで一杯でした。当 、私は15 16 でした。

その 、私はボンベイ空港で改宗に至りました。空港に母を迎えに行ったとき、彼女に私のシャハ ダ（信仰 言）に立ち会って欲しかったのです。 に、彼女は私にヒダ ヤ（き）があることを祈っていてくれたことを明かしました。彼女に手助けをするのは、自らの 女であることを彼女は っていたのです。そして神はその いを き入れたのです。ア ッラ フ アクバル。

私の弟や妹は幼かったですが、私の を追うようにしてイスラ ムに改宗しました。私たちはボンベイにヒジュラ（移住）しなくてはなりませんでした。なぜなら人々が私たち家族を引き そうとする恐れがあったからです。私たちは、ケ ララでは して宗教を 践出来ないことを知っていました。私たちに残された 肢はボンベイだけで、マ シャ ア ッラ（何であっても神の御意に 足します）、それを ぶことによって神の祝福が降り注ぎました。 地のムスリムたちは、手 を げて 烈に 迎してくれました。私たちはアラビア を 学び、学 を修了し、アルハムドゥリッラ（神に称 あれ）、今では素 な家に住んでいます。父は ってきましたが、残念ながら彼は未だに口 マ カトリック信者です。ただ、私たちは彼をととも していますし、 在の状 は私たち全 の んだ 肢でもあります。彼はイスラ ムについて学び、私たちの道であるイスラ ムとそれに った人生に して敬意を持っています。彼は私たちを 的に支える大 柱であり、イスラ ムには入っていないものの、私たちの信仰を妨げることなく育ててくれ、常に私たちのことを守ってくれているその姿は、まるで 言者（彼に平安あれ）の叔父アブ タ リブのようです。私たちの 戚は、依然としてイスラ ムに する な 心を抱いていますが、私たちがムスリムであることに わりが無いということを受け入れ始めたようです。今でも 々、私たちのキリスト教への を 促すメ ルが来ますが、 と共にそのメ ルの数も り始めています。

最近、私たちは 休を利用してケ ララの祖父母を れました。幼少を ごした故 に るのは素晴らしいことでした。私たちは神によって与えられたイ マ ン（信仰心）に自信を持って人々と接し、 利と共に 出来たことを神に感 しています。いつの日か、その地にマス

ジドやイスラ ム学 センタ などを 立することを ています。インシャ アッラ （神の御意で  
あれば）。

在、私たちがムスリムになって10年以上が ちましたが、まるで生まれたときからずっ  
とムスリムだったような 持ちです。

---

脚注：

1

タスビ フとは神を称 することです。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/2510>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。